

## ⑭ ニホンジカによる食害

現在の日本において、ニホンジカによる林床植生の食害は、生物多様性に対する最大の脅威になっています。絶滅危惧種を危機的な状況に追い込んでいる原因としても、シカの食害は、開発行為等をしのぐ最大の要因になりつつあります。

昔の日本には、シカの天敵として、ニホンオオカミがいました。シカが増えればオオカミも増える。オオカミが増えればシカは減る。このような食物連鎖の中で、シカはそう極端に増えることはありませんでした。人間がオオカミを絶滅させてからも、シカの天下はすぐにはきませんでした。うっかり人里近くに出てくればズドンと一発。シカにとっては危なくて仕方がない。そういう状態がしばらく続きました。けれども、鉄砲を撃つ人は次第に少なくなり、何も考えなくても鉄砲がオオカミの代わりだった時代は過去のものになってしまいました。

愛知県に隣接する静岡県南アルプス南部や三重県鈴鹿山脈では、林床植生は既に壊滅的な状態になっています。何年前か、紀伊半島で大雨が降って大きな被害が出たことがありました。過去に例がないほどの量の雨が降ったのは事実ですが、この場合も被害を拡大させた原因の一つは、ニホンジカの食害による林床植生の破壊によって、山が崩れやすくなっていたことではないかと思われます。

シカの場合、普通ならこれほどの状態になれば、次の段階の食物連鎖のコントロールが働きます。食糧不足で、シカの個体群崩壊が起きるはずです。ところが日本の山には、常緑樹がたくさんあります。シカは、食糧が少ない冬の間、かなり常緑樹の落葉落枝を食べて飢えをしをぎます。常緑樹の葉はシカの首が届かない高いところにありますから、その木が枯れるまで、食糧の完全枯渇は起きません。そのため個体群崩壊がおきにくく、必死に餌を探すシカの圧力で林床はますます荒れていきます。

愛知県では、一昔前までは三河本宮山周辺を除けばニホンジカがあまり生息しておらず、林床植生も良好な状態に保たれていました。しかし最近では、三河山間部一帯で多くのシカが見られるようになっています。低山地や丘陵地では現在のところあまり被害が出ていませんが、シカの分布域は次第に拡大しており、思わぬところで見たという報告もあるので、今後被害が顕著になるおそれがあります。

ニホンジカには特に好む植物、忌避する植物があるため、食害がある場所では最初に減少・消滅する植物がある一方で、増加する植物もあります。ニホンジカ自体を定量的に観察するのは難しいですが、これらの植物に注目することで、シカの動向をある程度把握することができます。



花は白色で  
小さい

(豊田市, 2008-8-24, 加藤範夫)

## マツカゼソウ

真正双子葉類 ミカン科

*Boenninghausenia japonica* Nakai

ざいらいしゅ

ふ

ようちゅうい

在来種だが、増えたら要注意

### 【形態】

多年生草本。茎は高さ 50～80cm になる。葉は互生し、3 回 3 出複葉、小葉は倒卵形～楕円形、長さ 10～25mm、先端は円頭、基部はくさび形、全縁で裏面は白色を帯びる。花期は 8～10 月、茎の上部に円錐状の集散花序となつてつき、花弁は白色、長楕円形で長さ 3～4mm である。果実は 4 分果に分かれ、分果は卵形で長さ約 3mm である。

### 【分布と生態】

日本固有種で、本州(東北地方南部以南)、四国、九州に分布する。ニホンジカの食害がある場所では、林縁や林内の明るい場所などに群生する。食害のない場所でも同じようなところに生育しているが、多いものではない。

### 【撮影のポイント】

ここでは形態がわかるよう個体写真を入れたが、食害を見るためには群落の写真がよい、

### 【参考資料】

県 GDB①p.312

代表的なニホンジカの嗜好植物。食害がある場所では、必ず本種が目立つようになります。ナガバヤブマオ、シダ植物のイワヒメワラビ、コバノイシカグマ、オニヒカゲワラビ、それに帰化植物のベニバナポロギクなどもニホンジカの嗜好植物で、食害がある場所では目立つようになります。できればこれらの植物にも注目してください。「増えて困るなら抜こう」ですって？ いえいえ、それは無駄。本種が増えるのは競合相手がシカに食われて減少するためですから、駆除活動は全く無意味です。



花は穂状

(豊根村, 2018-9-3, 芹沢俊介)

## コアカソ 真正双子葉類 イラクサ科

*Boehmeria spicata* (Thunb.) Thunb.

しょっこん み はんていぼく  
食痕を見つけやすい半低木

### 【形態】

半低木。茎の基部は木化してよく分枝し、高さ1~2mになる。葉は対生し、長さ8cmに達する柄があり、葉身は卵状ひし形、長さ7~11cm、幅3.5~6cm、先端は尾状に伸び、辺縁に深い鋸歯がある。花期は8~10月、雌花序は斜開して下垂し、帯紅色、長さ7~15cmである。葉が小さく半分程度の大きさのものはコバノコアカソと呼ばれ、2倍体で有性生殖を行うことが知られている。コバノコアカソも、ニホンジカの食痕を確認しやすい。

### 【分布と生態】

本州~九州、朝鮮半島、中国大陸に分布する。

### 【よく似た種】

クサコアカソは茎が木性にならず、葉がやや大きく、花序が上方を向く。

### 【参考資料】

県 GDB①p.262

沢沿いに生育する半低木状の植物。山地では普通に見られますが、ニホンジカが好んで食べます。もともと量が多い上に木本性なので食痕が残りやすく、被害状況を把握する上で特に注目したい植物です。シカの食害にあうと枝は短く刈り込まれ、葉がほとんど残っていないような状態になります。そしてこの状態が続くと、やがて株は枯死してしまいます。食害は林道沿いなどの目立つ場所から始まることが多いので、観察しやすいと思います。丘陵地で見られることは稀です。



花は紅紫色で  
目立つ

(岐阜県, 2010-8-8, 加藤範夫)

## ツリフネソウ 真正双子葉類 ツリフネソウ科

*Impatiens textori* Miq.

さわそ めだ か かたち はな  
沢沿いで目立つ変わった形の花

### 【形態】

山地の沢沿いに生育する1年生草本。茎は高さ 50~80cm、節はふくらむ。葉は互生し、葉身は菱状楕円形、長さ 5~15cm、幅 2~7cm である。花期は 8 月下旬~10 月上旬、花序は茎の先端部につき、5~15 花をつける。柄には暗色の突起状の毛がある。花は三角錐状で長さ 30~35mm、後端は距となって下方に巻く。

### 【分布と生態】

北海道~九州、朝鮮半島、中国大陸東北部に分布している。

### 【よく似た種】

エンシュウツリフネは静岡県西部~岐阜県に固有の植物で、花が小さく、葉の下に隠れるように咲く。県内では面の木峠と茶臼山に生育していたが、面の木峠はほぼ絶滅、茶臼山でも保護柵の中などに僅かに残存しているだけである。

紅紫色で大きな三角錐状の花をつけるツリフネソウは、秋の沢沿いで、最も目立つ花の一つです。栽培植物のハウセンカの仲間で、果実は熟すとはじけ、種子を飛散させます。種子は大きく、それなりに重さもあります。ところがこの種子、休眠性が全くありません。今年の種子は来春発芽しなければそれで終わり、そのため種子は毎年形成されなければなりません。ニホンジカなどの食害により種子が形成できない年が 1 回あれば、その場所からツリフネソウは消えてしまいます。ツリフネソウがずっと存続できる環境を守っていきたいものです。



果実は  
赤く熟す

(犬山市, 1996-4-26, 芹沢俊介)

## アオキ 真正双子葉類 アオキ科

*Aucuba japonica* Thunb.

おお みどりいろ は ていぼく  
大きな緑色の葉の低木

### 【形態】

雌雄異株。高さ2~3mになる。枝は太く、緑色である。葉は対生し、長さ1~4cmの柄があり、葉身は楕円形、長さ8~20cm、幅2.5~8cm、革質で無毛、表面は濃緑色で光沢があるが標本では黒変し、上部の辺縁にあらい鋸歯がある。花期は3~4月、枝先に円錐花序をつけ、花は直径8~10mm、花弁は4枚で通常紫褐色である。果実は楕円形、長さ1.2~2cmで赤く熟す。

### 【分布と生態】

本州(日本海側および中国地方を除く)、四国東部。種としては日本、朝鮮半島南部、台湾に分布する。しばしば庭木として植栽される。平野部の社寺林や河川敷の林などに生育しているものは、栽培個体からの逸出の可能性がある。

### 【参考資料】

県 GDB①p.289

山地の林内に生育する常緑性の低木。本種も本来の自然状態ではごく普通に見られる種類ですが、ニホンシカが好んで食べるため、食害にあうと最初に消える植物の一つです。本来ならあるなし情報だけでなく量的な変化も調べたいのですが、たくさんあったものが消失する過程を正確に観察するのは意外に困難です。できるだけ多くの現在食害がない場所、位置を決めて、林床の景観がわかるような写真を撮影しておくとういでしょう。通常の個体写真は、このような場合は全く役に立ちません。

花や実は葉の上につく

調査  
テ  
ー  
マ

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

調査  
し  
や  
す  
い  
月

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1

2

## ハナイカダ

真正双子葉類 ミズキ科

*Helwingia japonica* (Thunb.) F.G.Dietr.

(新城市, 2006-5-27, 加藤範夫)

はな は なかの  
花は葉の中乗りさん

### 【形態】

落葉性で雌雄異株の低木。高さ3mくらいになる。葉は互生し、長さ1~3cmの柄があり、葉身は楕円形~倒卵形、長さ4~13cm、幅1.5~7cm、先端は鋭尖頭、基部は広いくさび形~円形、表面は緑色で光沢があり、辺縁には低いが先が尖る鋸歯がある。花期は5~6月、花は緑色で小さく、葉表の中肋上に雄花は数個が束生し、雌花は通常1個つく。果実は球形、直径7~11mm、液果で黒色に熟す。葉が小さいものをコバナハナイカダという。

### 【分布と生態】

北海道南部~九州。種としては日本、台湾、中国大陸に分布する。山地ではところどころで見かけるが、丘陵地ではほとんど見られない。

### 【参考資料】

県GDB①p.299

沢沿いに生育する落葉性の低木。山地ではどこにもあるというほど多くはありませんが、特に稀少というほどでもありません。葉の中央に花がつくという変わった形態をしているため注意をひきやすく、観察の対象として面白い植物です。本種も二ホンジカによる被害を受けやすく、食害のある場所では最初に消えてしまします。若芽はママッコと呼ばれ食用になりますから、二ホンジカが好むのも当然かもしれません。本種も丘陵地では稀です。丘陵地でのモニタリングも必要ですが、特にこれに注目という種がないのが現状です。